

# 音楽・リズムあそびの課業化に関する研究

深山 千穂子

(女子聖学院短期大学)

## 幼児教育、音楽・リズムあそび、課業

### はじめに

現代はかつて日本人が経験したことのないほど物質的に豊かになった一方で、子供達は精神や身体の健全で調和のとれた発育・発達が進まれていると指摘されている。その背景には、子供を取り巻く環境が変化し、自然との触れ合いが減ったこと、核家族化や少子家族化、婦人の就労の増加等により、家庭の役割や機能が変化してきていることなどがある。また、経済的な豊さも外見だけで、余暇の時間的な増加に比して精神的には未成熟な社会に留まっていることも指摘される。

幼児の就園率は90%以上となり、子供達は人格形成の基礎を築く時期を、集団の中で育っていく。このような時代において、保育に求められる期待は大きい。しかしここでは、子供達が集団の機能を活かして、人や物と関わりながら主体的に活動するという経験を積み、子供一人ひとりの可能性を伸ばし、調和の取れた心身を築き、健全な人格形成の基礎を作るための適切な保育が行われているのだろうか。

### 研究の目的・方法

音楽・リズムあそびは、幼稚園教育の六つの領域のうち、「音楽リズム」に属するあそびである。音楽リズムは、指導要領の内容が領域の性格上親密的で理解しにくいこともあって、「何をなすべきか」が不明瞭であり、保育の現場では、手探りの状態で指導しているのが実状である。これは、教員養成機関においても同様である。

現場ですぐに役立つ教材集や指導書等の書籍・保育雑誌が多数出版されていることも、音楽リズムの特徴であり、現場の要請を反映しているものと思われる。

音楽リズムに関する先行研究の多くは、幼児の音楽的能力などの実験、観察、アンケートによる実態調査やその分析に基づいて現象面だけを捉える傾向があったり、西洋音楽至上主義を前提としているなど、研究の方法や問題の捉え方に偏りが見られる。教員養成機関における音楽教育の改善を目指した研究も、音楽リズムを指導するための技能を身につけさせるためのものが多い。このような科学的、理論的な基礎研究の遅れは、教育理念や哲学の欠落とも捉えられよう。また研究と保育の現場での実践との関係は円滑に行われておらず、研究のための研究といった様相を呈しているのが現状である。

一方幼児の教育は、学校教育法に示されているように、幼児の保護育成を略して保育と称し、幼児にふさわしい環境を与えてその心身の発達を助長することである。幼児の活動の中心はあそびであり、なかでも運動あそびは子供の

トータルな発達を促すために、特に幼児期において重要な役割を果たす。従って保育においては、運動あそびの指導に特別な配慮がなされるべきである。

本研究では、このうち音楽・リズムあそびを取りあげ、その課業化を模索し、指導法の例示を試みることを目的とする。

研究の方法としては、前述のような問題意識のもとに、音楽やリズムを音楽以前にまで立ち帰って捉え、保育内容としての音楽・リズムあそびを位置付け、子供の発達に即したあそびの内容を、心理指導と交錯させるという視点から課業化とその指導法を探る。これは保育現場における実践の前段階としての試案である。

## 1. 保育内容としての音楽・リズムあそび

### 1) 子供にとって音楽とは

音楽は、音を媒体とした自己表現の方法であり、感情の表現ともいえよう。

マーセルは、全ての感覚媒体の中で、音が最も感情と深い関わりを持っているとっており、音楽はあらゆる芸術の中で最も純粋に感情的であり、そのため人の心に訴えて人間生活の原動力になるという。<sup>(1)</sup>

子供はあそびの中で、自然に言葉や身振りを伴った音楽活動をしている。

永田は、子供の音楽表現の発達過程を次のように分類している。<sup>(2)</sup>

#### <1> 喃語表現

a. 初期の喃語 (1-3カ月)

b. vocal play (5-11カ月)

#### <2> ことば表現

a. リズム模倣表現 (7カ月-1才2カ月)

b. ことば学習表現 (1才1才11カ月)

#### <3> 遊び表現

a. 遊びへの表現 (3カ月-1才3カ月)

b. 遊びの模倣表現 (9カ月-1才5カ月)

c. 遊びの主体表現 (1才9カ月-3才1カ月)

#### <4> 歌表現

a. 歌の部分模倣 (1才4カ月-2才2カ月)

b. 歌の変化表現 (1才10カ月-2才6カ月)

c. 歌の全体表現 (2才2才7カ月)

#### <5> 即興表現

a. 断片的即興 (1才11カ月-3才1カ月)

b. 即興歌 (1才11カ月-3才1カ月)

このように、歌と言葉が未分化の時代からの音楽表現の発達を見ると、子供の発達の中に音楽はあり、発達にともなって発展していくことが理解される。子供の歌は、言語表現と身体表現に関わった無意識的な自己表現であり、言語及び運動機能の発達と深く関係しているといえよう。さらに表現するという行為は、自己解放と関わっており、精神の安定をも促す。

音楽の起源は歌であるともいわれており、楽器を持たない民族はあっても、歌のない民族はないという。歌は本来、一人のための音楽であったと考えられ、人類の発展段階の初期においては、自分の歌だけが音楽だったのではないかという藤井の説<sup>(3)</sup>と結び付けて考えると、子供にとっての歌も、初期においては同じように考えられる。また、民族・文化・時代によっても、子供に内在する音楽は異なったものが形成される。このことは、現在日本でこれほど西洋の特定の時代の様式に基づいた音楽が普及し、学校教育の中で教えられているのも、日本人の好きな歌は圧倒的に歌謡曲・演歌・民謡等である<sup>(4)</sup> ことを見ても理解できる。

子供にとっての音楽は、歌を例にしてみてもよいように、子供に固有の物として内在するものであり、言葉や身体への発達と共にあり、子供の心身の成長にとってなくてはならぬものといえる。

## 2) 子供にとってリズムとは

胎児は、母親の鼓動を胎内で聞いていたので、出生後も母親に抱かれて鼓動を聞くと安らかに眠ることが知られている。

リズムは音楽の中だけでなく、自然の営みから日常生活にまで存在しており、人間は胎内の経験に始まり生涯をリズムと共に生きていくともいえる。

子供はあそびの中で、身体の動きのリズムや言葉のリズム、音楽のリズムを楽しんでいる。また、音やリズムに身体全体で反応する。このように、リズムも子供に内在するものであり、子供一人ひとりが固有のリズム感を持っているといえよう。

藤井は、リズムは元来自然の現象や人間の呼吸・脈拍などの生理的現象、さらに人間の生活やその周期などが深く関わっている、また、言語や労働、社会、政治、宗教とも関わりを持ち、民族の文化の中にリズムの基本構造が認められる、従ってリズムの感覚は、本来的には個人的なもので、しかも民族や文化によって一定の共通の特性を持っていると述べている。<sup>(5)</sup>

例えば日本文化は、水田農耕を中心として展開しており、他の水田農耕地域と同じく、音楽は二拍子系のリズムを特徴とする。しかも、西洋音楽の二拍子とは必ずしも同じものではないという。<sup>(6)</sup> このことは、日本人は三拍子が不得手であると指摘されている事実とも関連するものである。

## 3) 子供にとって音楽・リズムあそびとは

1)、2) でみられたように、音楽もリズムも子供に内在しており、元来一人ひとりが固有のものを持っている。またそれは、心身の発達と共に変容していく。従って音楽・リズムあそびは、子供自身から出てくる表出や表現であり、自然発生的なあそびであると考えられる。ここでいう音楽・リズムあそびは、音やリズムを媒体にしたあそびのことであり、その具体的な活動は、歌う、聞く、弾く、作る、動くことである。

しかし保育という観点から捉えると、それぞれの子供のもつ音楽やリズムの感覚を、自然に任せず、よびさまし、発展させていくことにより、個性のある独自の表現を引き出すことが、保育の果たすべき役割ではないだろうか。集団の中で子供が音楽・リズムあそびを通じてコミュニケーションを図り、共通の経験をするることによって、音やリズムを共有したり、仲間との関わりの中でそれぞれの持つ個性を刺激し合っ、一人ひとり独自の音楽や、リズムを創りあげていく。このことが子供の音楽への興味や関心を培い、音楽に対する判断力や価値観を育てていく。また同時に、その過程で様々な能力 — 感受性、理解力、思考力、表現力、創造性、自主性、社会性など — を養うことは、人間形成の土台を築くことにもなる。

算はリズム運動を、子供一人ひとりの持っている身体のリズムを本能的なエネルギーの解放という快感のもとに十分表出させながら、次第に身体的意識化から表現活動への基礎の力を育てていくものであるという。これが幼児期の音楽活動の土台になるとしている。身体的意識化とは、身体が感じ、身体が覚えていくことであり、音とリズムによる運動経験をつむことによつてのみなされるという。<sup>(7)</sup>

ユーリズムの創始者であるダルクローズも、身体運動を通して音楽を学ぶ方法をシステム化している。

音楽・リズムあそびは、感覚と運動の相互作用により、音楽を身体で捉え自己のものとしていくあそびであるといえよう。

ところで、音楽・リズムあそびの一つとして、子供が歌うことを考えてみると、自発的に歌うのは気分がよいときであり、歌うことによって解放感を得られることの快さが、精神的な安定に結び付いていく。身体を動かすこと、楽器を弾くことも同様の効果があろう。この解放感の積み重ねが心のゆとりを生み、将来の余暇活動につながる基礎となっていく。

音楽・リズムあそびを表現として捉えると、それぞれのイメージを実現する活動であるともいえる。

中沢は、幼き日のイメージはその人の生涯の言動の基盤になりうるとし、教育は主体者である子供が、どれだけイメージを蓄え、どれだけ操作力を持つかということから検討されなければならないと指摘している。<sup>(8)</sup>

子供にとって音楽・リズムあそびは、感覚、運動、イメージ形成や精神的安定などと深く関わっており、人格形成の上でなくてはならぬものであるといえよう。それと共に、幼児期はそれらを身につける適期であることから、保育

における重要性が認められる。

## 2. 音楽・リズムあそびの課業化

### 1) 音楽・リズムあそびの課業化とは

既に述べたように、音楽・リズムあそびを保育内容として捉えるとき、子供の中にある音楽・リズムに関する能力を発展させ、人格形成の基礎を築くことが保育の課題である。本稿でいう課業とは、子供の自発的なあそびを妨げずに、子供の発達課題を保育者側にある文化と絡ませて、子供の可能性を引き出し、伸ばしながら、あそびが発展、変容するように援助したり、モデリングとなったりする保育の方法をいう。

重要なことは、子供を主体とすることであり、子供の自発性を尊重し、興味や関心を促して、意欲や創造性を養うことである。また、発達課題は、子供一人ひとりによって異なり、保育者側がその個性を見分ける目を持つことが必要となる。

音楽・リズムあそびの課業化では、まずこれらのあそびの持つねらいをどう捉えるか、そのためにはどうしたらよいかが課題となる。一つには、音楽やリズムを通して人間形成を促すことであろうし、あそびの中で、子供に充実感や成就感を味わわせることも重要であろう。そのためには、ダイナミックな活動が保証されることも求められる。

音楽・リズムあそびは技術にとらわれがちな活動であるが、技術より先に感覚を養うことが、あそびを豊かにしていくこと的前提であり、あそびを発展させるために子供が技術を必要と感じたときに、初めて技術は意味を持つてくると思われる。

環境を整えて雰囲気作りをし、一人ひとりの個性を認め、あそびのきっかけを与えたり、発展させたり、励ましたりする適切な言葉かけをし、共に楽しむことが保育者の課題である。

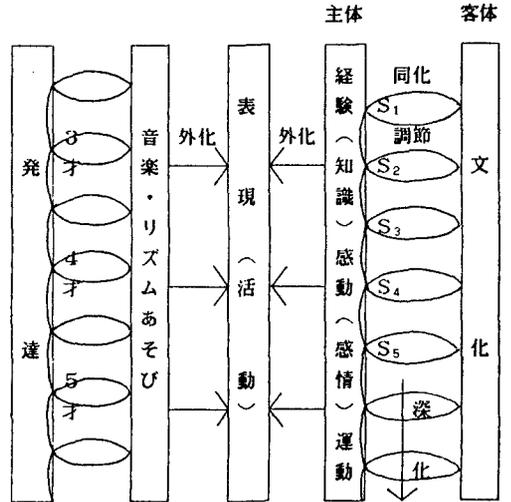
### 2) 音楽・リズムあそびの課業化のためのモデル

音楽・リズムあそびの課業化のためのモデルを試みるとき、その中心になるのは、「表現」である。表現は、文化や自然などに関わる経験の蓄積によって、感覚が鋭敏になり、主体の変容していく過程で感動が生じ、自然な表現欲求により外化したものである。主体における経験は、知識とも捉えられ、感動は感情でもある。経験、感動、運動は、たえず文化と関わりながら、調節、同化というサイクルで幼児の発達に即して深化していく。これを繰り返す毎に感覚、表現力、リズム感など、表現活動や音楽・リズムあそびなども深まっていく。

ここでいう文化とは、子供を取り巻く環境をさし、自然を始め、社会、家庭、そこで子供がかかわる人やものすべてを含んでいる。

一方、音楽・リズムあそびの内容は、子供の発達により、年令と共に発展していく。これを表したものが図1である。

図1. 音楽・リズムあそびの課業化のためのモデル



### 3. 音楽・リズムあそびの課業化の実際

4才児の発達と、音楽・リズムあそびのねらいと内容の例を表1に示した。

### 4. 音楽・リズムあそびを阻むものと促進するもの

#### 1) 音楽・リズムあそびを阻むもの

子供を取り巻く時代、環境などによって、音楽・リズムあそびを阻むものも変化してくる。

今日においてはまず、思い切って身体を動かし、エネルギーを発散させる経験の少ないことがあげられる。

この背景には、住宅事情、道路事情、公園整備の遅れなどからくる遊ぶ空間の不足、幼少時からのおけいこ事などによる時間の不足、大勢の仲間や兄弟と遊ぶ機会の不足などがあり、ダイナミックに遊びを展開する経験が少なく、一人ないし少人数で静的に遊ぶ傾向がある。また、音や音楽の氾濫した環境で育ち、音に対する感覚が鈍化していることもあろう。

長時間のTV視聴により、受身の姿勢が形成され、間接経験のみ増えることによって感動が希薄になり、表現や創造の源泉となるイメージが貧困化していることもあげられる。その他、親や保育者の過保護・過干渉、ないし不適切な言葉掛けなど、人との関わりに起因すると思われる情緒不安定、自発性の欠如、集中力・注意力の不足等、更に、物質的に恵まれているため、自分で工夫してあそびを見つけたら、発展させていく意欲の欠如、何度でも試みるといった耐性の低下などがあげられる。

表1. 音楽・リズムあそびの課業化の実態  
(4才児)

発 達	あそび	ねらい	内容
3才迄の一人あそびや平行あそびから皆と一緒にあそべるようになる	うたあそび	友達と一緒に歌う	友達と一緒に知っている歌を喜んで歌う <sup>(9)</sup>
自己のリズムを外界のリズムに合わせて調整することが出来る <sup>(10)</sup>	リズムあそび	曲に合わせて身体を動かす	音楽に合わせて手を叩いたり、歩いたりする
全身を使う運動が活発になり手指の動きが巧みになる	動きのあそび	のびのびとリズムミカルな動きを楽しむ	スキップをする <sup>(11)</sup> リズムミカルな動きを好んでする
想像力が伸び、言語の発達によってイメージを言語化できる	きくあそび	いろいろな音色を聞き分ける	楽器の音色や響きに興味を持ち、感じを言葉で表せる 音楽の持つ感じを言葉で表現できる
友達に目が向く 仲間意識・連帯意識を持つ		友達の歌や演奏を聞く	友達の歌や演奏を喜んで聞くようになる

## 2) 音楽・リズムあそびを促進するもの

逆に音楽・リズムあそびを促進する条件として、情緒や自発性が育っていること、感性が豊かであること、好奇心が旺盛であること、リズムや音に敏感に反応すること、適切なモデリングが与えられていること、自由が認められていること、更に親や保育者の言葉掛けが子供に励ましを与え、好奇心を促し、遊びを発展させていくのに適切で、子供にとって共感を持つことが出来るものであることなどがあげられる。また、マスメディアについても情報や刺激の与え方によって、間接経験であっても豊かなイメージを蓄

積させることが期待できる。

音楽・リズムあそびを阻むもの、促進するもの何れもが、親の養育態度や保育に関わる部分が多く、人間として調和のとれた成長を阻むもの、促進するものとも共通しているように思える。

## 5. 音楽・リズムあそびの指導法

### 1) 音楽・リズムあそびの心理指導とは

保育の原点は、子供を主体として、それぞれのもつ可能性を伸ばし、全人格的な基礎を築くことであろう。そのため、保育者が主体となって画一的に指導するのではなく、各々の個性を尊重し、子供の心理に働きかけ、子供の自発的な活動を支えていくことが求められよう。

保育内容としての音楽・リズムあそびの指導は、とかく保育者が主体となって行われる傾向が強い。植田は、リズム遊び、身体表現、楽器あそびにおいては、調査した範囲では全てが、保育者の誘導ないし指示によるあそびであったという。あそびを進める方法も、これらのあそびにおいては子供には意識されておらず、子供は保育者の指示に動かされていたと述べている。また、運動、リズムあそびでは、子供が主体的・創造的に活動できるように働きかけた例が僅かにみられるが、楽器あそびではみられないと報告している。<sup>(12)</sup>

この様に、音楽・リズムあそびにおいては、子供の意欲を高める指導はなされにくい。これは、文化の伝達に保育のねらいが傾き、保育者が子供に求める水準も、子供の発達に比して高くなっていることの現れと推察される。

### 2) 音楽・リズムあそびの指導法の実例

以上のように課業化、発達とあそびの内容、あそびを阻むものと促進するもの、心理指導について述べてみた。ここでは試みとして、4才児を対象とし、実際の指導法の例を、前述した発達とあそびの内容に心理指導を交錯させて示した。

#### 例1

保育者は、カマボコの板や、コップ、空かん、短い木の棒など、身の回りにあるもので、工夫すれば音の出そうなものを用意し、子供が自由に触れることの出来る状態にしておく(コーナーなどにまとめておく)。

二、三人の子供が興味を持っていじっている。そのうち叩くと音の出ることに気付く。音を試しては聞き、叩き方によって音の響きや音色に生ずる変化に関心を示す。

保育者は、子供がうまく音を出して遊び始めたのを見て、興味を持って近付き、仲間にいれて欲しいと頼む。保育者も初めは子供と同じように、いろいろな音を出して一緒に遊んで楽しむ。

それを見て、他の子供達も傍らにきて一緒に遊びたがる。子供達は、保育者や友達の出している音を、興味を持って

で聞き合う。

保育者は、いろいろなリズムで試してみる。子供達は、模倣して楽しむ。保育者は、子供の反応を見ながら、強弱をつけたり、速度を変えたりしながら、子供とリズムの掛け合いを楽しむ。

この活動では、既製の楽器を使わず、叩き方も、出てくる音も様々な可能性を持つと思われるものを、子供が自由に触れられるような状態にして、何日かコーナーに出して様子を見ることから始まる。子供のうち何人かが、音を出すことに気付いたときからあそびが始まり、保育者も一緒に楽しむ、あそびが発展していくようなきっかけを与えている。また保育者はモデリングともなっている。

このようにモデリングとなるためには、保育者はあそびの状態を見る目を持ち、進行状況を把握して、あそびに関わる適切な時期を掴む必要がある。

## 例2

ある日、園庭に小鳥が飛んできた。子供達の何人かが小鳥を追いかけて、鳴き声に興味を持って模倣して遊んでいる。

しばらく子供達が熱中して、あそびが頂点を越えた頃、保育者は「ことりのうた」を、無伴奏でリズムカルに、感じをつかんで歌う。

子供は、ビビビビビ、チチチチチ、ピチクリチーの箇所に興味を持って聞き、その部分から模倣が始まる。

保育者は、小鳥の鳴き声を模倣していた子供達に、「さっきの鳥は、歌の小鳥のように鳴いていたのかしら」と問いかける。

子供達の中でいろいろな鳥のイメージがふくらみ、おもいおもい鳥になったつもりで、身体の動きを伴いながら、「ことりのうた」を歌い、友達も歌も聞きあう。

この活動も、子供達の自発的なあそびの中からきっかけを掴んで、あそびを展開した。子供が興味を持った鳥の鳴き声を活動の中心とした。この活動には伴奏楽器を使用せず、音程やリズムのずれより、一人ひとりがイメージを描いて歌うことにねらいをおいた。この曲の特徴でもある付点のリズムの歌い方によっても、曲の感じが全く違ってくることに気付くこともねらいにおいた。子供の歌の上手、下手よりも、保育者の歌う歌の質が問われよう。

## おわりに

臨時教育審議会は、最終答申において21世紀に向けての教育改革の視点を述べている中で、芸術、科学、技術等のあらゆる分野において必要とされる資質・能力として、「創造力・考える力・表現力」の育成が重要であることを強調している。<sup>(13)</sup>

本研究で取り上げた、音楽・リズムあそびも、同じ能力を育成するために、特に幼児期において必要なものである

ことは既に述べた通りである。

この研究を通じて、保育は保育者の問題であることを再認識させられた。保育者自身の原体験の欠如や、感情的な未熟成など — 基本的には幼児期に身につけておくべき資質であるが — が、子供の成長に与える影響は計り知れない。

これらは同時に教員養成機関の課題でもあり、豊かな人間性を備えた保育者の養成が求められよう。保育者は、保育の専門家であるという自覚を持って自分自身を高め、次代を担う子供達の教育に当たって欲しいと願う次第である。

なお、本研究は試論の段階であり、今後は保育の現場での研究を重ねて、深めていくことが、私自身の課題である。

## 文献

- (1) J. L. マーセル, 音楽教育と人間形成, 音楽之友社, 1970, p38
- (2) 永田栄一, 子供の音楽表現の形成と学習, 音楽教育研究26-29, 1980-1981, 音楽之友社
- (3) 藤井知昭, 「音楽」以前, NHKブックス, 1986, 日本放送出版協会, p81
- (4) NHK放送世論研究所編, 現代人と音楽, NHK, 1982, P68
- (5) (3)と同じ, P68
- (6) 同上, p108
- (7) 箕三智子, 子供の発達と音楽, 音楽之友社, 1985, p127
- (8) 中沢和子, イメージの誕生, NHKブックス, 日本放送出版協会, 1979, p190
- (9) 磯貝静江, うたの根源を追って, 立正短期大学紀要18, p294
- (10) 吉田孝, 3、4才児におけるリズム行動の特質と発展段階移行, 松山東雲短期大学研究論集10, 1979, p34
- (11) (9)と同じ, p299
- (12) 植田ひとみ, 遊び指導と自己教育力の育成, 高知女子大学保育短期大学紀要10, 1986, p18
- (13) 教育改革に関する第四次答申, 臨時教育審議会, 1987, p12.